



降旗 洋平

日本信号  
取締役会長



入社して初めての海外出張がアルゼンチンのブエノスアイレスでした。第二次オイルショックが世界経済に与えた大きな傷跡が癒えぬ1980年(昭和55年)10月初旬のことでした。

当時の日本社会は、世相混沌<sup>こんとん</sup>しており、長嶋茂雄氏の読売巨人軍監督解任やモスクワオリンピックボイコット事件、政権政党である自民党に党内抗争が発生し内閣不信任案が可決され解散総選挙となるが、その期間中に大平正芳首相が急死するなど世間を騒然とさせる事件が起き、また米国ニューヨークではジョン・レノン殺人事件が発生した時代です。

当時、アルゼンチンとは、日本の鉄道関連業界が参与した首都ブエノスアイレス圏鉄道路線網の一つであるロカ線の電化に伴う大型ターンキープロジェクトが進んでいました。私は、それとは別にブエノスアイレス市地下鉄事業のコンセッション方式参加可否の調査のために派遣されました。上の写真は、当時の地下鉄車内の写真です。

訪問した首都ブエノスアイレスは「南米のパリ」と称され、日本よりはるかに立派な街並みがヨーロッパの景観を彷彿<sup>ほうふつ</sup>とさせ、かつて富裕国であったことを十分に感じさせるものでした。半面、社会インフラはいささか時代遅れの感が強く、街には1920年代のクラシックカー(写真中央)が走っていました。

現地のパートナー会社との打ち合わせを開始しましたが、「明日マニャーナ(Hasta Mañana)」のスピリットを発揮され、「そんな遠い日本から来て何を急ぐのか、アルゼンチンタンゴでもゆっくり楽しめ」と言われ、まったく打ち合わせのスピードが上がりませんでした。私自身も気楽に10日ほどの出張予定で来ていましたが、気付いたら1カ月を超えてしまっていました。

その当時、現在のようにクレジットカードが普及しておらず、現金とトラベラーズチェックが全てで、途中で滞在費がなくなり会社へ送金の要請をしましたが、到着するまで野宿を覚悟の不安な毎日を過ごした記憶が鮮明に残っています。さらに不幸なことに帰国の途中、交通事情調査の一環でブラジルのリオデジャネイロ市に立ち寄ったところ、空港で私のトランクがなくなるアクシデントに見舞われ、着の身着のままに日本に帰国することになりました。

初めての海外出張は惨憺<sup>さんたん</sup>たるものでしたが、30有余年の時空を超えて、最近アルゼンチンとのビジネスチャンスに恵まれ、ディエトリッチ運輸大臣と面会する栄誉に浴しました。この37年前のほろ苦い体験とわずかに手元に保有していた当時の貴重なコインとガイドブックをめぐり大臣との会見が大変盛り上がり、「災い転じて福となす」結果に終わることができました。

思い出のアルゼンチン出張  
災い転じて福となす



37年前のブエノスアイレス市を走る地下鉄の車内で



市内を1920年代のクラシックカーが走っていた



ディエトリッチ運輸大臣と面会